

## 資本・資本家・資本主義

### — 経済学への登場 —

馬 場 宏 二

2008年5月10日～5月30日

マルクスの主著名が『資本論』であることを想起するまでもなく、資本は経済学最重要の概念である。そしてヨーロッパ諸語なら当然これから派生する、資本家や資本主義も、経済学ひいては社会科学全体のキーワードである。本稿では、この三つの用語が、経済学の古典に登場した模様を浚って見る。

もとより先行研究がない領域ではない。まず藤塚知義の1983年の論文<sup>(1)</sup>は、スミス『国富論』での「資本」特にCapitalの登場とその理論的意義を論じた労作である。それは徹底的な文献探索を伴う深い考察を示しており、今なお多分にそのまま依拠し得るところのある名作である。敢えて批評すれば、スミスに集中し過ぎたため、前史特にペティ以前への考察が不足したことで、そこにも今日なお有意な史実が存在する。また、これには比較すべくもないが、2003年には私自身「資本家」と「企業者」の登場を考察し<sup>(2)</sup>た。これには考証の補完がなお必要な上に、切り口を更えたほうが考察の意義を明確に出来る。さらに、初発は私に先行するが、重田澄男氏は、マルクスが「資本主義」なる語を用いなかったとの着想を実証するために4冊の本<sup>(3)</sup>を書き、その範囲で考証上は小さからぬ成果を挙げた。しかし用語の検討は、広い視界の中で行なわれるほど豊かな成果を挙げるものである。重田氏がなぜ「資本主義」だけに固執し、もっと広く「資本家」や「資本」に遡及しようとしなかったのか、その方が不思議なくらいである。

本稿の狙いは、力の及ぶ限りで視界を拡げることである。無論、充分拡げるには力不足であり、逆に、拡げたことで細部の考証が粗雑になる危険もある。だがここでは問題の大筋を示し得れば良い。視界の限界や考証の不足は、後日補完すべき課題として残しておきたい。

## I. 経済学におけるCapitalの初出

経済学を遡ると中世にも古代ギリシャにも及ぶが、近代における経済学の端緒は、モンクレチアン『経済学要綱』<sup>(4)</sup>である。何よりも、近代ヨーロッパ語で経済学を示す語、*Économie Politique*を書名にした最初の本である。この語自体はフランスで統治学の意味で用いられたことが多いようだが<sup>(5)</sup>、書は製造業・貿易・航海・王の行動基準の四章からなる政策論だから、明らかに経済学書である。

もっとも、この書を経済学の端緒とすることが定説化しているわけではない。同書は1615年にルーアンで出版されたが長く埋もれ、19世紀半ばにガルニエによって発掘されたらしい<sup>(6)</sup>。1889年にはフク＝ブレンターノ<sup>(7)</sup>の解説付で、パリで再版された。この間世に影響したことはほとんどないらしく、『国富論』は無論のことマカロック<sup>(8)</sup>やマルクスのような文献通も、これに言及していない。20世紀の碩学シュムペーターは晩年の『経済分析の歴史』のなかでは取り上げたが、「十七世紀の余り重要でもない一人の作家によって政治経済学と名付けられ」「彼の著作はこの事実によって不当にも不滅なものになった」「業績としては平々凡々なものであり独創力に全く欠けている」<sup>(9)</sup>と、論争的ながら、いささか疑問なほど酷評している。おそらくそうした事情のために、経済学の起点という扱いを未だに受けられないのである<sup>(10)</sup>。

しかし、シュムペーターも気付いてないようだが、モンクレチアンは意外なところでペティと繋がっており、その意味で経済学の起点となる可能性がなお残る。本稿で取り上げるCapitalの用法も、この可能性を補強する一助となり得るのである。

さて『経済学要綱』には、「資本」の意味では*fonds*が数回使われている<sup>(11)</sup>が、*capital*も一回だけ使われている<sup>(12)</sup>。他に「元金」の意味で*principal*が二回使われていて<sup>(13)</sup>、この現れ方は、後で見るペティの場合の、*stock, capital, principal*の現れ方と相当良く似ている。フランス語の*fonds*の語感に英語の*stock*と相通ずるところがあることの反映でもあろう。だが特に、*capital*には注目すべきである。因に*stock*は現代フランス語に逆輸入されているが、この書には出て来ない。

問題の*capital*はオランダ東インド会社への参加諸都市からの出資金を意味している。それがペティとの意外な繋がりを補強するのである。

なお、これとは一応別件だが、同書にはentrepreneur, entrepriseが使われている<sup>(14)</sup>。大航海や植民地獲得の企画や企画者の意味だから、今日の企業家と同義である。従来entrepreneurの初出はセイ『経済学要綱』か、それより古くはカンティロン『商業試論』だとされていた<sup>(15)</sup>が、実はさらに120年古いモンクレチアンが既に使っていたのである。

## II. ペティのCapitalとStock

モンクレチアンがどこまで経済学を体系化していたかには議論の余地があるが、ペティとなると確かに経済学—社会の経済像の全体的把握—を体系的に提示している。彼は政治算術と自称した社会統計的手法に依拠しつつ、財政的視角からのイギリス社会像、アイルランドの社会経済像、それにオランダ・イギリス・フランスの社会経済の比較を示し、その中で貨幣銀と穀物の価値的換算に関わって労働価値説を提示し、さらに自ら二大生産要素と捉えた労働と土地の価値的換算を「政治経済学」最大の問題と捉えた<sup>(16)</sup>。スミスに完全に一世紀先行する、ヨリ骨太な経済学の体系的提示である。『国富論』を経済学の生誕などと捉えるのは、スミスの巧妙な偽装に惑わされた結果である<sup>(17)</sup>。

さてペティは「資本」を多用した。原語はほとんど全てStockである。管見の限りでは、Capitalを用いたことは一度しかない。このことを捉えるのは比較的容易である。松川七郎の極めて律儀な直訳的邦訳<sup>(18)</sup>があり、たいていの場合Stockを「資財」、Capitalを「資本」と訳し分けているからである。Capitalは『政治算術』の中でオランダ東インド会社の資本（金）を指す語として用いられ<sup>(19)</sup>、それ以外には出て来ない。モンクレチアンの場合と全く同じである。なお当面注意しておくべきは、類似語としてまず、元金と訳されたPrincipal Moneyがあり、これはペティの主要三書に各一回、計三回現れる。Fundが少数回、それ以外にはStockが頻出する。他の翻訳者同様松川もこれを「資財」と訳し、それでほぼ一貫している。だが原語の語義は、II—Bで触れるようにもともと多様である。それを反映して、用法はある程度多様だが、ペティの用法では、今日われわれが「資本」と概念化した語の範囲に納まる。

Stockに該当する訳語「資財」は、「投下した資財」、「資財の利潤」、「労働・土地・技芸・資財」、「事業に必要な資財」、「貿易を運営する資財」「商人の資財と信用」、さらには「アイルランドの全資財」、「百万以下の資財」等と用いられている。実体的には貯えられ

た貨幣か財貨、機能的には企業運営あるいは生産の諸要素の一つである。資産と言い換え得る場合もある。Stockにははるかに多くの意味があるが、ペティの用例、そしてもう少し後に取り上げる諸経済学者の用法では、ほぼ「資本」と言い換え得る経済用語になっている<sup>(20)</sup>。Stockはなお株式資本を意味するJoint Stockとして経済用語になっているが、これはペティには現れない。彼が示す株式はフランス語由来のActionである。これはイギリス東インド会社の株式のことだから、個別の株を意味するShareが何かの事情で使い難かったのかもしれない。さてここで二つの補説が必要である。

## II-A. モンクレチアンとペティ

既にしたこと<sup>(21)</sup>だが、今回の考察が補強になるかも知れないので繰り返しを厭わず整理しておく。モンクレチアンは1575ないし1576年生まれで、カン大学college de Caenで詩を学び、卒業後劇作家として立った。最初の著作の印刷允許が1601年初に下りているから、在学したのはぎりぎり16世紀末と推定し得る。劇作家として成功作を二三書いた後イギリスへ渡り、その経済発展に印象づけられて、国策として王に捧げる『経済学要綱』を現わしたのが1615年である。その後宗教対立に巻き込まれ、1621年にカン市近郊の戦いでピストルで打たれて死んだ<sup>(22)</sup>。

さてペティも、どうやら同じカン大学College de Caenの卒業生である。松川七郎の考証によれば<sup>(23)</sup>、口減らしのために家を出てキャビン・ボーイになり、足を傷めた状態でカン市近くの海岸の船員宿に放置されたのが13歳、1736～7年ころである。フランス語も知らないのに、グラマースクールで習っていたラテン語を操って強かに生き抜き、ラテン語とギリシャ語を話すイギリス少年と珍しがられて、カンにあるジェスイットのコレージュCollegeに、寛大な条件で入れてもらえた。在学は1630年代末と推定できる。第二次大戦時にカン大学 (Université de Caen) がドイツ軍の基地にされ、連合軍の猛爆を浴びて完膚なきまでに破壊されたから、この辺りの学問史に関する確かな資料は残っていないだろうが、どうやらペティはモンクレチアンと同門の40年弱後輩に当たる。とするとペティのように鋭敏で語学力に富む少年が、先輩の劇作家がイギリスに学んで書いた、*économie Politique*なる書名を持つ本、そして船員経験者だけに大航海にかなりの紙幅を割いた本を、記憶に留めておいたことは充分ありそうに思える。ましてやその先輩は宗教紛争絡み

で20年足らず前にカンの近郊で悲劇的な死を遂げていた<sup>(24)</sup>のである。だからペティが『アイルランドの政治的解剖』の中で、土地と労働の価値的通算を「政治経済学におけるもっとも重要な問題」<sup>(25)</sup>と書いた時、この先輩の本の書名が念頭にあったのではないか？因にペティのこのPolitical economiesは、OEDでは長く無視されて来たが、英語におけるPolitical Economyの初出である。すなわち「政治経済学」として世界化した「経済学」なる語は、モンクレチアンが、当時むしろ統治学として使われ初めていたフランス語を、イギリスの経済的発展の印象のもとに「経済学」に転用し、さらにそれを後輩のペティが英語化したものと推測できる。そこから後、文献上の証拠は明確ではないが、ほぼ百年後のスチュアート『経済学原理』の書名や叙述に現れ、『国富論』を経て世に定着する<sup>(26)</sup>。

今回示した、モンクレチアンのCapitalとペティのCapitalが全く同義であることも、両者の繋がりを推測する補強の一助になる。強く解すればこれもéconomie Politique同様、ペティが先輩モンクレチアンから読み取っていた。語義が細部に至るまで全く同じだからである。しかし他方、単なる暗合かも知れない。いづれにしる文献上の物証は見出せない。あるいは中間の、Capitalの同じ用法が両時代に全欧的に一般化していてそれぞれにその意味で用いたという推測も成り立つかも知れない。次に触れるように、会社の資本金の意味のCapital、簿記用語のCapitalが西ヨーロッパ諸語で共用されたとすれば、両者それぞれが同じ語彙を使用していたことにもなる。いづれにしる決め手はない。しかし通常全く問題にされないモンクレチアンとペティの関連が、案外強いかも知れないと予想する手掛かりにはなる。モンクレチアンを「資本」出現探索の端緒に置く理由は以上である。

## II-B. 英語のCapitalとStock

二番目の補論。危険を承知で、全く基礎知識のない比較言語学的領域に発言する。まず、Capitalはラテン語由来である。語義は『羅和辞典』によれば「死に値する罪」の意味である。この語がロマンス諸語に受け継がれ(『ロマンス語語源学辞典』)、英語に流入した。現在の英和辞典に、主要な、資本(Capital gainは米語)、見事な、とんでもない、と並んで死罪の意味があるのはラテン語語源の反映であろう。この間に語義は「会社の資本金」に転じていたようである。

その事情はつまびらかにしないが、藤塚論文<sup>(27)</sup>が、この語は簿記用語としてイタリア

語、オランダ語、フランス語を経由して、16世紀後半にはフランス語から英語に入ったと示唆している。藤塚の探索に依拠すれば、簿記用語Capitalの英語語源考証について、キャン→リチャーズ→ハットフィールドと論が進む<sup>(28)</sup>につれて、英語にCapitalが導入された最初はインピンの『簿記新教程』<sup>(29)</sup>の1547年の英訳であることが漸次明らかになった。われわれの考察から、経済学における最初の用例がモンクレチアン、英語経済学の最初がペティ、いずれもオランダ東インド会社の資本金の意味だったと捉え得るが、それはCapitalのかような国際的の波及過程の一環だったと言えよう。

ところが、英語にはもっと前からStockという語があった。これは明らかにゲルマン系の単語だが、英語で多用される中で、語義が経済用語の方へ拡張されたい。そこでまず、英和辞典によって主要な語義を拾い出して見ると、以下のごとくである。：—

Stock 1. 貯蔵・財産 2. 家畜 3. [英] 公債・国債、[米] 株式・株券 4. 血統・家系・群生・言語 5. 台木・柄・幹・床 6. 原料、スープ種、7. 襟巻 8. …の的 9. 幹・茎・切り株・丸太・木片 10. 接ぎ木の台木・親木 11. 紫羅欄花（アラセイトウ） 12. 造船台 13. さらし台・手かせ足かせ 14. 上質煉瓦。——これでまだ単語としての意味を全部列挙したわけではない。しかも、これに加えて、Have in stock在庫持合せ、Have money in the stock国債で金を持っている、on the stocks建造中・企画中、got books on the stocks読まねばならぬ本がある、等々慣用句がむやみに多い。さなきだに語彙が多い英語のなかで、これは特に語義が広い単語であろう。そこで、一方ではこの語が、他のゲルマン系の言語でいかなる語義を持つかを見る。とりあえずドイツ語とオランダ語。

まず『岩波独和辞典』では：—

Stock 1. 幹・株 2. 切り株 3. 杖・ステッキ 4. 金箱・足枷 5. 木版 6. 山脈の集団 7. 卵巣等である。語義は語根の部分では英語のStockと同じであるが、貯蓄・財産・国公債・家畜<sup>(30)</sup>等経済用語は、別種の語彙で表現される。但し辞書には、Stock 2として、元手・資本の義も掲げられている。

つぎに、講談社の『オランダ語辞典』では、：—

Stok 1. 棒切れ 2. 杖 3. 止まり木 4. 警棒 5. 指揮棒 6. 旗竿。つまり英独共通する語根的語義とは対応するが、それと対応しない、経済に関わる語義はここにも

含まれない。家畜はドイツ語のViehに対応するVee、財産もドイツ語と同形のvermogen、貯えはドイツ語のVorratに対してオランダ語にVoorraadの語がある<sup>(31)</sup>。因に英語のStockはフランス語に逆輸入されている。過程の詳細は判らないが、輸入された語義はまさに今の、英語で拡張された経済用語としての部分だけである。

大修館『スタンダード仏和辞典』にはこうある。：—

Stock [英] 1. {商} ストック、手持品、在庫品 2. {財} 現金保有高 3. 貯蔵物。つまりドイツ語のtockとフランス語のstockを合わせると英語のStockの語義をほぼカバーすることになる。

おそらく、イギリスの経済発展がフランスでも注目され出した後、Stockのうちの英語として拡張された経済用語向けの部分、つまりゲルマン系の根源的な語義を除く部分だけが流入したのであろう（因にフランス語に、木の株とか家系の意味でestockと言う単語もある）。

OEDによれば、経済用語、つまり、資金とか貯蔵品とかの意味のStockが用いられたのは15世紀末からで、16世紀にはいくつもの用例がある。商人の元本の意味では1709年が最初とある。他方、商業用語としてのCapital—Capital stock or fund—の最初の用例は1611年である。

ここはOEDが(インピンはともかくとして)ペティを完全無視して来た科であって、1670年ころには「資本金」の意味のCapitalも経済用語としてのStockも、ともに用例があったことは、われわれがすでに知るところである。しかしこのペティを含めても、経済用語としてのStockの出現が一世紀以上古いことはこれで判る。

### Ⅲ. スミスの前史

結論を先取りすれば、経済学でCapitalを多用し、今日の「資本」の意味—経済の主体として、統一性と同時に多面性のある概念の性格—を与えたのは、フランスの経済学者、特にチュルゴである。スミスはそれを模倣吸収し、『国富論』特にその第二編で英語に転用した。その『国富論』を継承し、CapitalにCapitalistを加えたのがリカードら古典派経済学者だったが、古典派隆盛によってイギリスが経済学の本場となり、おそらくこうした歴史の結果、『国富論』が、資本の概念を示すCapitalの初発と錯覚されがちになったものと思

われる。

ペティがCapitalを一度だけ、特殊な意味で使っていた。その後のイギリスで、他の面でペティを継承した諸著作者も、この語は継承しなかったようである。その代わり、ペティが多用したStockはごく普通に使われている。その中でスミス直前のスチュアートだけは、Capitalを複数回使った。そう多くはないし、どこまで独自の用語となっていたかに疑問があるが、ともかくこれで、ペティ・チュルゴ・スチュアートという、スミスが明白に識っていながら隠蔽した、ひょっとすると『国富論』の書名にさえ影響した三先学が、Capitalの用法においても先行者だったという、いささか作り話的な図式さえできあがる。ひとまず英書経済学における用例を、粗っぽく見ておこう。

### Ⅲ—A. 英語経済学書の用例

藤塚論文が、これに関してきわめて丹念な探索を行なっている<sup>(32)</sup>。まず、8点の各種辞典におけるCapitalを比較しつつ整理する。行論との関係で重要な指摘を拾っておけば、(A)17世紀初頭までにフランスでは名詞としてのCapitalが使われているが英語ではまだ使われず、仏語から英語への流入を推測させる。(B)18世紀初期のフランスの商業辞典に、Capitalは商人や銀行家が共同事業を営む際の総出資額、Capital資本は利潤または利得に対する語だが、利潤はしばしばCapitalの増加に充てられ、結合して資本となる、とある。(C)18世紀半ばの辞典には、CapitalあるいはCapital stockは、貿易会社のFundまたはStock、または共同出資した場合の貨幣総額とある。

ついで藤塚は英語の経済書10点から、時代順にCapitalの使用例を拾う<sup>(33)</sup>。最初は、われわれが既に見たペティの『政治算術』。つぎが1696年、匿名の『貨幣論』で、capital stockが二度出てくるが、これは資本というより貯えで、stockと同義だろうという。第三は1728年刊ダニエル・デフォーの『イギリス経済の進路』で、Capitalが例外的に一度だけ出てくる。4番目がヴァンダーリント『貨幣万能』で1734年刊。Capitalが二カ所都合5回、利得に対する元本の意味とStockの意味で使われている。翌年のバークレー『問い質す人』にはCapital Stockがある。6番目がリチャードソン『外国貿易衰退の原因』の1750年版で、CapitalとStockが同じセンテンスの中で使われている。同年のアンドルー・フック『国債および国民の資本』には、表題のNational capitalの内わけとして、貨幣・個人資財・土



地の三つのStockがある、としている。1757年刊のポッスルスウエイト『イギリスの商業の利害』にも、Stockに挟まれながらCapitalが同義で用いられている。第9番目がサー・ジェームズ・スチュアート『経済学原理の探究』、1767年刊。これにはCapitalの文字は計4出てくる。これについては後で触れる。10番目が1774年刊、タッカー『政治経済問題四論』に、Capitalが豊富とか農工業経営に用いられるCapitalとかの用例がある。これに藤塚は、「この他の諸論策においては、この語はあまり見当たらないようで、資本と訳され得るところはほとんどStockなる語になっている。これを以て見れば、スミス以前のイギリスにおける経済諸論策においては、Capitalという語は一般には使われることは少なく、また使用されている場合でもほとんどStockと同義」<sup>(34)</sup>と付け加えている。まことに敬服すべき探索と言って良い。

実際、筆者自身も、藤塚が取り上げなかったが、ペティやスミスとの関連では重視すべき論者を数人探索して見た。例えばトーマス・マン、サー・ジョサイヤ・チャイルド、チャールズ・ダウ”イナント、ヘンリー・マーチン。無論著作全てを当るなど初めから論外で、手元で読める代表作かその邦訳に限られる。邦訳と言うだけならサー・ダッドリー・ノースやニコラス・バーボンも含まれる。だが管見の限りでは、「資本」は悉くStockであり、チャイルドが、仏訳だと数回Capitalを使っているが、英語原文では彼も悉くStockである。ヴァンダーリントはフランドル系のせいかわ大陸的なCapitalを使っている。

スチュアートの場合は『原理』の索引が整っていないせいもあって探索に手が掛かり、藤塚の成果を追認するにとどめた<sup>(35)</sup>。スミスの前史としてスチュアートは重視すべき存在で、特に『国富論』の完全無視は嫉妬反発を伴う露骨な意図的無視だったことが明白である<sup>(36)</sup>ため、両書の内的関連は注意深く探索される必要がある。しかし、Capitalの用法に関しては、スチュアートからスミスへの影響はそう大きくなさそうである。スチュアートの用例は他の英書経済学に比べれば多いものの、頻用と言えるほどではなく、一つはCapital Stock、他の用例の語義は元本、流通手段、国富と、さほど統合されていないからである。スミスはこの語の用法に関して、イギリス経済学からあまり影響を受けなかったのではあるまいか。かくして問題はフランス経済学に至る。

### Ⅲ—B. カンティロン

スミスは、ともかくもカンティロンの名を記していた。ケネーやデュポン・ドゥ・ヌムールのフィジオクラートの他は先行する経済学をあらかた無視し、ホッブズ、ロック、モンテスキュー、ヒュームの、通常哲学者とされる論者に敬意を表しても、経済学者となると、グレゴリー・キング、トーマス・マン、サー・ジョサイヤ・チャイルド、チャールズ・ダヴィナントの名前を挙げた程度のスミスが為したことだから、書名なしに名を挙げただけでも注目に値する。ましてやその著『商業試論』が、発行情報が複雑で後世埋もれた時期もあるとなれば、結構重要なことかも知れない。20世紀初頭の『国富論』<sup>(37)</sup>編者キャナンによれば、『商業試論』の影響は『国富論』全体では10カ所以上に及び、同書はスミスの蔵書に残されていた(ASL)から、いわば愛読書である。刊行200年記念の新版『国富論』<sup>(38)</sup>編者、スキナー・トッド・キャンベルは、カンティロンが影響した可能性のある箇所を『国富論』中40以上上げている。そのカンティロンが、かなりの先駆的学説の提唱者であり、またチャイルドやダヴィナントやマーチンとともにペティ継承者であり、むしろペティ説の内在的検討者であることも注目に値する。

カンティロン<sup>(39)</sup>は「資本」を30回余り使っている。原語は大部分fonds。因に仏和辞典には、fondsは、土地・地所、暖簾・営業権・版權、蘊蓄・素質、資金・基金・積立金、資本金・元金、公債・国債、とある。これは英語のstockに匹敵する、地元語的経済用語であろう。しかし『商業試論』では5カ所にcapitalが使われている<sup>(40)</sup>。語義はかなり明確に、貸し付けられた貨幣である。この用法が直接スミスに影響した可能性もある。『国富論』第二編第四章冒頭に「利子付きで貸付けられる資財は、貸手からはつねに資本と見なされる。かれは、期限が来ればそれは自分に回収さるべきものであること、またそれまでのあいだ借手はその使用に対して一定の年々の賃料を自分に支払うべきものであることを期待する」<sup>(41)</sup>とある。無論チュルゴからの影響も考えられ、また、18世紀半ばには英語のCapitalが、既に、利子を取って貸し出される貨幣額・利子に対する元本の意味に定着していたのかも知れないが。

## III-C. チュルゴ

ケネーの『経済表』で有名なのは前貸しavancésである。別の文章でcapitalを使った例も皆無ではない<sup>(42)</sup>が、その用法がスミスに直ぐ影響したとも思えない。スミスにおけるCapitalに影響したのは、avancésを直接capitalに言い換えて多用した、チュルゴ『富の形成と分配に関する諸考察』<sup>(43)</sup>である。

チュルゴ経済学の形成史はこの際興味深い問題だが、フランス経済学史に疎い筆者には発言力皆無である<sup>(44)</sup>。もう一つの問題は、『国富論』にチュルゴの名すらなく、他にもスミスに影響した物証がないことである。ただ近年のスミス探索が、両者間に多様な交流があり<sup>(45)</sup>、スミス在仏時にかなり深く経済学的意見交換をし<sup>(46)</sup>、スミスがチュルゴを信頼して、親友ヒュームに「この人は貴兄の友人となるに価する人です」と書き送った<sup>(47)</sup>など、相当濃厚な状況証拠を挙げている。影響はあったと見て良からう<sup>(48)</sup>。

件の『諸考察』は100節からなるが、全編挙げて資本概念の解明である。資本Capitalの話は、複数形のCapiteauxも含んでほぼ100回使われている。fondsは数回出てくるが、ほとんどが土地資産の意味だから資本の原語として加えるまでもない。同時に資本家Capitalistesの話も、しばしばentrepreneursと対になりながら、計16回使われている。これに対して『国富論』では、Capitalはほぼ500回、他にStockが300回近く使われているが、叙述総量が17.6倍だから、capitalの出現頻度はチュルゴが数倍高い。なお注目すべきは、スミスは企業者entrepreneurは無論として資本家Capitalistもも使っていないことである。この点は後に改めて触れるが、かような形式的対比だけでもCapitalの使用におけるチュルゴの先駆性は明らかである。

さて『諸考察』で「資本」の初出は第29節の表題である。その前の諸節は、商業の成立は土地配分の不均等に由来するという命題に発して、生産力的発展、階級分化、土地所有の成立を論じている。資本概念成立の論理的歴史的前提の概観である。ここの歴史的構図は、マルクスなら資本制生産への先行諸形態、スミスなら「資財の蓄積と土地の占有との双方に先行する初期未開の社会状態」<sup>(49)</sup>に該当するが、スミスがチュルゴから吸収したのかも知れない。チュルゴの図柄は豊かだが、フィジオクラートの偏向やスチュアートとの共通性が伺われて興味深い。

資本概念の本格的考察は第49節からである。中間の20節は、貨幣の存在を一応前提した上で諸商品間の等価性を追求し、各商品は他のすべての商品の価値を比較するための尺度すなわち共通の基準の役目を果たしうる、逆に貨幣はすべて本質的に商品である、と言う。その後で素材的に価値尺度に適した金銀が貨幣になるとする。ここはマルクス価値形態論の先行説である。チュルゴは商品価値の同質性を深く把握した上で、「貨幣生成の謎」を総括的に解明した。マルクスほど明確な図式化には至らず、中で最難問の一般的等価形態の導出についてはスミスに及ばなかったが、基本的論理としての商品価値の同質性を深く把握して総括的構図を示した点でスミスを超えており、マルクスがこの考察を「ブルジョア経済学によって一度も試みられたことがない」<sup>(50)</sup>中に一括してしまったのは、いささか乱暴ではなかったか。

その後で資本概念が本格的に論ぜられる。資本を形成するために蓄積された生産物が、まず動産の富の形を採る。動産の富は、家具家屋貯蔵商品家畜の類だが、それが営利活動の不可欠の前提をなす。貨幣が知られると富の蓄積は主として貨幣の蓄積になった。すなわち資本である。それは土地と交換されて一定比の収入を生む。資本は計五つ、地所の購入、土地を賃借する耕作企業への投資、工業製造業への投資、商業への投資、そして年々の利子を条件とした貸し付け、の用途がある。資本は諸企業の継続に再投入され利潤を伴って回収される。これが貨幣の循環とよばれるべきものである—ここは資本の本質を言い当てたものとして、特に高く評価されるべき把握であろう<sup>(51)</sup>。

貸し付けについてはさらに、利子の根拠を確認する。土地所有を基本とする、年々定収入を生む所有権だと言うのである。また、利率が借手貸手間の需給によって定まり、それと商品売買の際の貨幣量とは異なる。利率が基準となって、地価にたいする土地収入はヨリ低く、農工業商業の利潤はヨリ多いと、均衡論的な精緻な考察もなされる。

以上極めて明晰かつ体系的な考察である。スミスは、語の用法は吸収したとして、これを超える資本概念を追加し得たのだろうか。

#### IV スミスのCapital

スミスの前作、『道徳感情論』と『グラスゴー大学講義』にはCapitalは出てこない。『国富論』の中でも、第一編、第二編第一章まではStockの方が多く、Capitalが急増するのは

第二編第二章「社会の総資財の特殊部門と考えられる貨幣について、すなわち国民資本の維持費について」以降、第三章「資本の蓄積について、すなわち、生産的および不生産的労働について」、第四章「利子付きで貸し付けられる資財について」、第五章「資本のさまざまな用途について」においてである。第三編ではまたStockが多くなり、第四編第二～第七章と第五編三章でまたcapitalの方が多くなる。スミスが英書に伝統的だったStockを基盤としながら、そこへチュルゴ由来のcapitalを持ち込んだことを、この用語配置からもほぼ推測し得よう。

さて、『国富論』第二編「資財の性質、蓄積および用途について」におけるスミスの資本概念を概観する。まず「序論」で、分業の行なわれる社会では、労働に先だって資財の蓄積が行なわれる必要がある、蓄積が進めば分業はさらに発展する、と言う。それが第一章「資財の分類について」の当初、蓄積された資財は直接の消費を満たす部分と収入の源泉となり得る部分とに分かれる、後者が資本である、とする把握に繋がる。この構図は明らかにチュルゴを下敷きにしている。スミスらしく分業の有無で社会を区分して見せるが、チュルゴはそれを商業の有無で区分し、貨幣化によって分業が生ずると述べていた。そしてスミスの蓄積される資財Stockは、チュルゴの動産の富richess mobiliariesの言い換えに他ならない。ただ、スミスは第一節後段で固定資本・流動資本の区分を示した。その解明には時々混乱があるが、ともかくこの区分はチュルゴを超えている<sup>(52)</sup>。

第二編第二章は結構長い章で、途中から銀行論、銀行機能・銀行信用・銀行券を、それもかなり具体的に論じており、それはそれで先駆的とさえ言える理論を含むが、章の大筋で見ると、貨幣量の維持は社会の収入からの控除に他ならないと言うものである。これはチュルゴ『諸考察』の終わりころにある、一国の富を計測するのに貸付資本額を含めてはいけないとする議論を連想させる。チュルゴがストックで捉えようとしたことをヒントに、スミスがフローで捉え返したとも解し得る。そして、スミスが独自に展開した銀行論は、それ自体相当な水準だと言って良い。第三章は資本蓄積についてだが、生産的労働・不生産的労働と言う、後世に厄介な議論を齎した論点を含む。前章同様、この辺りは、チュルゴが形態論的・法制的把握が強いものに対して、スミスが実体論的・機能論的把握を特徴としていることが窺われて興味深いところである。資本蓄積についてはスミスは個人にも政府にも勤勉節約を推奨し、浪費・無思慮を戒める。ここはチュルゴがその第80節で

極めて簡潔に述べたことの詳論とも言える。

スミス第四章の貸付資本論については既に触れた。章冒頭の内容規定はカンティロンあるいはチュルゴに由来するのではあるまいか。価格にかかわる購買手段としての貨幣量と利率にかかわる貸し付け資本量とが区別されることとか、土地購入は一般に貨幣貸し付けより利率が低くなることなどは、チュルゴが既に述べていたところである。

第五章「資本のさまざまな用途について」は、チュルゴの分類の換骨脱胎であろう。スミスは粗生産物の調達、粗生産物の製造調製、運送、小口分割の四つとした。チュルゴ第82節の整理、地所購入、農業、工業、商業、貨幣貸付けの五つに比べて、生産主義的整理だが何かワザらしい。下敷きを使いながら、どこかで独自性を示そうとした了見がはっきり示されている {なおこの整理、チュルゴの第82節に難解なところがある。第一が地所購入、第二は「貨幣を耕作企業に投資して、土地を賃貸すること」とある。賃貸では論理的に整合しないし、先に該当する内容を述べた第62節では賃借りになっていた。原語の *affermer* は厄介な単語らしいが、どう考えたら良いか<sup>(53)</sup> }。

スミスはチュルゴを完全に模倣したわけではないし、時にはチュルゴを超える説を示した。しかし議論の大枠は、まずチュルゴを下敷きにし、ほぼその展開に即す形で行なわれている。細部の議論でも、チュルゴが示した論点をヒントに、取り込んだり、自分の文脈に引きつけたり、ズラしたりしたと見得るところがかなり多い。スミスは、着想力の上では見かけほど独創的ではなかったものと思われる。

## V. 「資本家」の登場—スミスからリカードへ

一度論じた<sup>(54)</sup>点だが視角を更える。スミスには資本家 *capitalist* が登場しなかった。そもそも資本でさえ、ゲルマン語系の *stock* だったのに、フランス経済学特にチュルゴの影響で、ラテン系外来語の *Capital* を多用することになったのである。ましてや資本家 *Capitalist* は、英語に相当語もなかった。『国富論』でそれらしいことを表現する場合には、製造業者、商人、農業者、それに親方といった、その場その場での用語を使っている。OEDには、*Capitalist* の初出はアーサー・ヤング『フランス紀行』1792年とある。確かに、A. Young, "Travels during the Years 1787, 1788, and 1789... of the kingdom of France"<sup>(55)</sup> に、A gross evil of these direct impost is, that of moneyed men, or *capitalists* escaping all taxation... とあ

る。語義はこの場合金持ち程度のことであろう。これが『国富論』の16年後、リカード『経済学および課税の原理』<sup>(56)</sup>の23年前である。

この間、『国富論』の改版・増刷が何回かあり、フランスでは、1803年に、J. B.セいの『経済学要綱』<sup>(57)</sup>が出版されたが、イギリスではさほど画期的な経済学は出現しなかった。画期はリカードの書であった。そのリカードは、資本家の語を当り前のように多用した。『原理』における「資本家」の出現は20回を超えるが、もはや回数は問題ではない。語義は一般には出資者且つ企業経営者だが、単なる出資者の場合も、また利潤生活者の場合の含めて、地主・資本家・労働者と、三大階級の一つを表現する、経済学当然の用語となっているのである。

多少考えておいて良い問題は、リカードのこの用法がどこから来たかである。アーサー・ヤング以来Capitalistが英語化したのでリカードはそれを日常用語として用いたのか、あるいはこの語の使用では先行していたフランスの経済学者から直接導入したのか？—今のところ決め手は見出せない。しかし、フランス経済学から直接入った可能性が結構高いように思われる。まず、OEDが示す用例では、ヤングの後は1823年のコールリッジ、ついで1845年のディズレーリー、同年のJ. s.ミルである。いずれもリカードより後だから、キャピタリストが一般語化してからリカードが使ったのではなく、リカードが使って後キャピタリストが次第に英語化したと解し得る。ミルが出てくるのも、後で触れる資本主義Capitalismの現れ方も、この解釈の補強になる。他方、リカードは『原理』の「序言」で、「この学問はチュルゴ、スチュアート、スミス、セイ、シスモンディおよびその他の人々の著作によって大いに進歩」したと述べていた。スチュアートにもスミスにもCapitalistはない。ところが、フランス人学者の場合は、チュルゴが、capitalisteを先行的に多用していたし、リカードの論敵セイは自らcapitalisteを使ったばかりか、紹介し賞賛したスミスが、英語の限界—「資本家」と「企業者」を区別する語彙を持たない英語の限界—のために理論的にも限界に蓬着していることを指摘していた<sup>(57)</sup>。また、リカード訪仏時に直接交流したシスモンディもcapitalisteは当然のように使っていた<sup>(58)</sup>。「資本家」は、語をフランス経済学から継承したリカードが経済学的に範疇化したことで、かえって一般語として定着したのではなかろうか。むしろOEDがなぜリカードを見落としたのか、ペティの場合以上に即時に影響があっただけに、不思議なのである。

## VI. 英語の「資本主義」

重田澄男氏の考証があるから、改めて「資本主義」の語源考証を試みる必要はない。ここでは、この語の登場が一般的に遅く、特に英語で遅く、しかも当初は体制用語ではなかったことを抑えておけば済む。最初の資本主義国イギリスで、なぜこんなことが起こったのか。

「社会主義」は資本主義批判の用語として現れたと解されているが、最初に登場したのは1803年イタリアにおいてだと言う。「社会主義者」の初出は1827年、オウエンの『協同組合雑誌』、「社会主義」Socialismeの初出は1832年、サン・シモン派の機関誌『地球』<sup>(59)</sup>の由。この『地球』誌への出現からはOEDに取り込まれている。

このフランス語は、Personnalité（個性主義の意）の対語として用いられている。英語のSocialismの出現は1835年のオウエン派からだとこの語学辞典にはある。「社会主義」が「資本主義」批判語だとしても、言語史的に「資本主義」の語が流布して後「社会主義」が登場したのではない。どちらが先かはかなりの考証を必要とする。

OEDによれば、Capitalismの初出は、1854年作、サッカレーの小説「ニューカム家」である。その用例は：—

The sense of capitalism sobered and dignified Paul de Florac.である<sup>(60)</sup>。このCapitalismは、あらかじめ「資本を持っている状態、資本家の地位、資本家の存在に好都合なシステム」と説明されているから、今の例文は、ポール・ド・フロラックは、自分が資本家であると考えていたから、冷静で威厳のある態度を取った、と言う意味になる。例文のCapitalismは、「金持ちで、しかるべき階級に属していること」である。この語に社会体制の意味も皆無ではないが、それはまだ語義の片隅にある。

「資本主義」は、世界史的には本家本元のイギリスで、まさにその全盛時代になったころによく、個人的な地位を表現するために用いられ始めたのである。マルクスが如何に社会状態に批判的だったとしても、初めから体制表現としての「資本主義」を使うはずはない。



## 結び—マルクス語源学の不思議

マルクスが経済学の研究を始めたのは1840年代半ばからである。その頃「資本」の語は当然に使われていたし、「資本家」の語も存在した。日常用語としてどの程度使われていたかは筆者などには判断出来ないが、フランス語経済学には既にあり、リカード後のことだから英語経済学にも入っていた。ただ、「資本主義」はまだ存在しなかった。単語としてフランスにもまだなかったようで、経済学で使われていなかった。社会経済体制を表現する語になるべくもなかった。英語には単語さえなかった。結局マルクスは、研究の過程で、「資本」は当然として「資本家」には頻繁に遭遇し、その「資本家」が主導する経済社会体制を、総括的に「資本家的生産様式」と呼んだのである。だから「資本主義」は使わなくとも済んだ。ここから後「資本主義」と言うとするれば、資本主導體制を意図的に志向する理念の意味になる。19世紀末以降、マルクス主義等各種社会主義運動が、現在の体制を資本主導・資本家有利の偏った体制だと批判する意味で使ったものと思われる。コミンテルンの「資本主義」もその延長上にある。それが一つ捻じれて、1970年代以降のアメリカで、資本主義は良いものだと開き直った含意で使われるに至り、昨今のグローバリズムのイデオロギー的起源となった。

マルクス自身が「資本」や「資本家」の語源学に言及したかどうか、充分探索してない。筆者の記憶にしろあつたのは、『資本制生産に先行する諸形態』の中で、「KapitalのもとにはViehである」と言ったこと<sup>(61)</sup>くらいである。だがこれは特に語源学と呼ぶようなものではない。ドイツ語で育った人間なら当然に持っている知識であろう。それより不思議なのは、マルクスがCapitalのラテン語語源に言及していないらしいことである。語根のcaputは頭・人・水源…だがCapitalは死罪、シャレとしてもこんな使いやすい場合は滅多にない。ヨーロッパの知識人として、ラテン語には当然なじんでいたから、彼ほどの批判的精神を以て「資本家的生産様式」に向き合ったら、当然「資本」の語源は「死罪」だと連想しそうなものである。それをどこかで言っているか？あるいは彼はその着想を、『資本論』第24章の本源的蓄積論の中に埋め込んだのだろうか？

## 註

- (1) 藤塚知義「アダム・スミスの〔資本 (capital)〕論—『国富論』におけるストックとキャピタルの区別と〔資本〕概念の定立」『金融経済』第二百号、1983年6月—以下藤塚論文と略称
- (2) 馬場宏二「“資本家”と“企業者”」大東文化大学『経営論集』6号2003年9月、のち馬場宏二『もう一つの経済学』、御茶ノ水書房、2005年に再録。この補正として、馬場「『国富論』の“企業家”」『経営論集』第12号、2006年9月。
- (3) 重田澄男『資本主義の発見』御茶ノ水書房1983年、『資本主義とはなにか』1998年青木書店、『資本主義を見つけたのは誰か』桜井書店2002年、『マルクスの資本主義』桜井書店、2006年
- (4) Antoyne de Montchrétien, *TRAICTÉ de L'ECONOMIE POLITIQUE*, dédié en 1615, Salatkine reprints, 1970. Réimpression de l'édition de paris, 1889.
- (5) 馬場宏二「ペティと『国富論』」大東文化大学『経済論集』87号、2006年7月46ページ。
- (6) 参照、メンガー著福井孝治・吉田昇三訳『経済学の方法に関する研究』、岩波文庫、1939年、38ページ。
- (7) フンク=ブレンターノはルヨ・ブレンターノの甥で中世史家。石坂昭雄氏のご教示による。
- (8) J. R. McCulloch, *Literature of Political Economy*, London, 1845.
- (9) シュムペーター、東畑靖一訳『経済分析の歴史1』1955年、岩波書店、39439ページ。
- (10) 日本では新渡戸稲造がハレ大学に提出した独文の博士論文で触れたのが最初だが、戦前に高橋誠一郎や舞出長五郎ら経済学史家が専ら書名著者名を紹介していた。戦後出たこの本の紹介研究は、管見の範囲で、岩根典夫「モンクレチアン『政治経済要論』における富国思想と貿易政策(1)」関西大学『商学論究』16-4、1969年3月、山川義雄「アントワヌ・ド・モンクレチアンの『政治経済論』」、早稲田大学『政治経済学雑誌』244~5合併号、1975年1月。
- (11) Montchretien, *TRAICTÉ de L'ECONOMIE POLITIQUE*, *op. cit.*, p. 50, 51, p. 91, p. 254, p. 350.
- (12) *op. cit.*, p. 253.
- (13) *op. cit.*, p. 206, p. 254.
- (14) *op. cit.*, p. 283.
- (15) 参照、馬場前掲書、第二章。
- (16) ペティ著松川七郎訳『アイアランドの政治的解剖』1951年岩波文庫、133ページ。
- (17) 参照、馬場宏二「スミス・マカロック・マルクス」大東文化大学経済研究所『経済研究』21号、2008年3月、35~36ページ。
- (18) ペティ著松川七郎訳『アイアランドの政治的解剖』、同『租税貢納論』1952年、同『政治算術』1955年、いずれも岩波文庫。
- (19) ペティ上掲松川訳『政治算術』34ページ。
- (20) 後代、マルサスは「国民収入の中、資本家に、彼の資本の使用に対する代償として、帰属する部分を、論ずるに当って、それを貯財stockの利潤の名で呼ぶのが通常である。併し貯財はこの場合資本capital程適当な表現ではない。貯財とはより一般的な語であり、そして、それが何に向けられようと一国の総ての物質的所有物又は総てのその現実の富である、と定義し得られようが、然るに資本とは、かかる所有物の中、…利潤の目的を以て使用せらるべき特殊部分である。併し乍ら両者は屢々無差別に用ひられて居り、そして恐らくそれから何等の大きな誤謬も生じ得ないであらう。併し総ての資本は貯財であるけれども、総ての貯財は正当に云へば資本でないことを…想起するのは有用であらう」と整理している。マルサス吉田秀夫訳『経済学原理』下、岩波文庫、1937年、80ページ。この整理は解り良い。
- (21) 馬場前掲「ペティと『国富論』」46ページ。
- (22) Montchrétien, *op. cit.*, pp. V~XVIII.
- (23) 松川七郎『ウィリアム・ペティ』1967年、岩波書店、56~60ページ。
- (24) Montchrétien, *op. cit.*, p. XVIII
- (25) ペティ前掲『アイアランドの政治的解剖』133ページ。

- (26) OEDによると、Political economyは、もともとフランス語で、英語では1767年のスチュアートの書名、1776年『国富論』での用例、1825年のマカロックの定義「経済学とは、交換価値を持ち、人類にとって必要か有用か快適な諸物品の生産、分配、消費を規制する諸法則の科学である」を経て定着した。ペティは忘れられ、1989年版Politicalの項で追加された。
- (27) 藤塚論文二(1)三、65～69ページ。
- (28) E. Cannan, “Early History of the Term Capital” in *Quarterly Journal of Economics*, Vol. 14, No. 3, May 1921. : R. D. Richards “Early History of the Term Capital” in *Quarterly Journal of Economics* Vol. 40, No. 2, Feb. 1926. : H. R. Hattfield, “Earlier use in English of the Term Capital” in *Quarterly Journal of Economics*, Vol. 40, No. 3, 最後のハットフィールドの文章は、先行のキャナンやリチャーズが上げるピールの1569年の簿記の本よりさらに古いのが、インピンの本の英訳で1547年のものだが、それは大戦で失われ、紛失前に写された諸写本によって見るしかない。その第九章にCapitale, Stocke, principalの用法が出てくる、と言う、重要だがごく短い文である。これにイタリヤ人がCapitaleと言っていたことは出てくるから、イタリヤ→オランダ→イギリスの波及過程は推測できるが、藤塚が付け加えた、蘭→仏→という翻訳の順序は、同文館『会计学辞典』第五版が示す、ヴェネチアで複式簿記論を学んだインピンがオランダで『新教程』を書き、彼の死後、未亡人がフランドル語版と、自らの手になるフランス語版とを、同じ1543年に出版した、英訳は1547年に出たが訳者不詳、とする経緯の方が正確であろう。
- (29) 筆者が実見したのは、Jan Ympyn Christoffels, *Nieuwe instructie ende bewijs der looffelijcker costen des Rekenboeck*, 1543, Scholar press : London, Yushodo press : Tokyoである。この中にCapitteelの文字が見出せる。今のオランダ語ならKapitaalであろう。
- (30) 独和辞典のViehの項にいきなり「家畜は昔主要財産であったので、財産、金銭の意に転ずる」とあって、その後に①家畜…と出てくる。そう言えば英語で家畜はLivestockである。
- (31) 生憎オランダ語の知識がない。ここはその道の先学、鳥井裕美子、石坂昭雄両氏のご教示を仰ぐかたわら、独蘭辞典を見得ないのを補う意味で、Cassell's *English-Dutch, Dutch-English Dictionary*を参照した。
- (32) 藤塚論文二(2)、(3)、特にその [A], 『金融経済』前掲号、69～78ページ。
- (33) 藤塚論文、前掲号、74～78ページ。
- (34) 藤塚論文、前掲号、77～78ページ。
- (35) 藤塚の探索によると、『経済学原理』中のCapital使用は四回である。1. 第二編第25章、「たとえ彼等の利潤が生じるもとである資本Capital Stockを世間の目から隠しおおせるとしても」(小林昇監訳・竹本洋他訳『経済の原理』第1、第2編、名古屋大学出版会321ページ、原文は“*The Works of Sir James Steuart*, vol. 1, 1805, p. 26) : 2. 第二編第27章、「この操作が行なわれると、ただちに100万枚の紙幣が消滅してしまつて、流通資本the circulating capitalは400万枚の紙幣と100万個の正貨だけになる」(同前347ページ、*op. cit.*, p. 65)、3. 第二編第29章、「このことは既得の資本former capitalを減少させる」(同前、380ページ、*op. cit.*, p. 111)、4. 第四編第一部第二章、「貨幣にたいする利子の規則的支払いは、元本Capitalが返済されるという信頼と同じぐらい、信用の獲得にとって不可欠」(同第3、第4、第5編、2244ページ、*op. cit.* vol. 2. p. 147.)
- (36) スミスのパルトニーへの手紙。E. c. Mossner, I. S. Ross ed., *Correspondence of Adam Smith.*, 1977, p. 164.
- (37) *The Wealth of Nations*, edited by Edwin Cannan, 1904. これを底本とする邦訳として、大内兵衛・松川七郎訳『諸国民の富(1)～(5)』岩波文庫があり、律儀な直訳調なので、本稿のような原語探索にはもっとも便利であるが、水田洋監訳杉山忠平訳『国富論』に交代してしまい、かえって不便になった。
- (38) General Editors R. H. CAMPBELL and A. S. SKINNER, Textual Editor W. B. TODD, *Adam Smith An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations*, 2vols, Oxford U P, 1976.
- (39) R. カンティロン、津田内匠訳『商業試論』、1992年、名古屋大学出版会。
- (40) 仏文はRichard Cantillon, *Essai sur la Nature du Commerce*, edited with an English Translation by Henry

Higgs, A. M. Kelley, New York, 1964. この本は英仏対訳である。

- (41) 大内・松川訳『諸国民の富(2)』374ページ
- (42) 百科全書に載せた「穀物論」で一度、『農工金融雑誌』に変名で載せた「金利の考察」で4回Capitalを使っている。*Œvres économique et philosophiques de F. Quesnay Avec une Introduction par August Onken*, Paris 1888. p. 202, 400, 4001~2.
- (43) Anne-Robert-Jacques Turgot, “Réflexion sur la formation et la distribution des richesses” en *Œvres de Turgot et documents le concernant*, avec biographie et notes, ed. par Gustave Schell, Paris 1913-23, vol. 2e, 津田内匠訳『チュルゴ経済学著作集』1961年 岩波書店、所収「富の形成と分配にかんする諸考察」。なおチュルゴオ永田清訳『富に関する省察』1934年 岩波文庫、も参照した。
- (44) とりあえず、上掲永田訳『…省察』の「解題」参照
- (45) Cambell, Skinner, Todd ed., *Adam Smith, the Wealth of Nations*, 1976は『国富論』に対するチュルゴの影響の可能性を分業の効用初め計10カ所指摘しているが、pp. 672~673の編者註では総括的に両者の交流に触れている。スミスが訪仏時にチュルゴと会い、共通の関心事である経済学の問題を議論したろう、モレの追想録の中に、われわれはエルヴェシウスの家で何度か会い、商業理論、銀行、公信用その他いくつかの論点を語ったとある、さらにスミスのヒューム宛の手紙やロシュフーコ宛の手紙で、チュルゴに会った、と喜んでいることなど、間接形だが多くの資料を重ねて交流を示している。同じ『国富論』刊行200年記念の伝記、I.S.ロス『アダムスミス伝』にも交流が記されている。いわく、『道徳感情論』第二版にチュルゴへの贈呈本がある。『国富論』中の重農主義批判部分はスミスとチュルゴの交流の中でそれぞれに形成した。ボドーが創刊した『エフェメリード』誌の1769年11月から1770年1月号にチュルゴ『諸考察』を載せており、スミスは1969年分を持っている(ASL)から、彼はチュルゴの本文の3分の2に接していたことになる。またスミスは、ボーモンの『ヨーロッパの課税と租税に関する覚書』は大変な希覯本で、自分はそれをチュルゴの特別な好意によって手に入れた、と手紙に書いている(篠原久・只腰親和・松原慶子訳、2000年、シュプリンガー・フェアクラーク東京社刊、人名索引参照)。
- (46) 上掲*Wealth of Nations*の編者註と、邦訳『アダムスミス伝』246~247ページ。
- (47) 訪英中のルソーがロンドンでヒュームと紛争を起し、ヒュームが立腹して訪仏中のスミスに、経緯を文章にして暴露しようかと手紙で相談したのに、スミスが返事して、われわれスコットランド人が、王が下さると言った年金を断るようなフランス人と争って勝てるわけがないからおやめなさい、と忠告した、その中に、こちらパリでは誰某氏も誰某夫人もみな同じ意見ですとあり、そこへ「チュルゴ氏、この人は貴兄の友人となるに相応しい人ですが、その人も同じ意見です」とある。ただの顔見知りではないことが判る。*Correspondence of Adam Smith*, 1977, P. 113.
- (48) 藤塚は、結論的にはチュルゴがスミスに影響したことを強調しており、シュムペーターがチュルゴとスミスの理論的類似性を指摘しながらなお、スミスがチュルゴ『諸考察』を知らなかったとする考証不足を批判し、ランドバーグ『チュルゴ「諸考察」の英訳者とアダムスミス』を挙げて両者の文体上の類似性を指摘しつつ、影響説の根拠としている。ランドバーグは文体比較によってスミスがチュルゴ『諸考察』の英訳者だったと主張したいらしいが、私にはこの文体比較の含意は読み切れない。しかし逆に、藤塚が「理論構成に見るかぎりスミスの方がはるかにととのっておりかつ体系的論理的」(藤塚82ページ)と言うのは、結局スミス信仰の現れではなかったか。ここはむしろシュムペーターのように、チュルゴ説が信じ難いほど強靱だと確認するとともに、模倣的なスミスの方が学説史上主流になってしまったのはなぜか、と問うべきではなかったか。
- (49) 『国富論』第一編第六章冒頭。
- (50) 『資本論』第一章第三節冒頭。
- (51) マルクスは、チュルゴがケネーの「前貸し」を「資本」と言い換え、製造業者の資本と借地農業者のそれを同一視し、資本の環流を貨幣流通と捉える等ケネーからの理論的前進を示したことに注目している。『資本論』第2巻、大月書店、マルクスエンゲルス全集、24、232、417~8、442ページ。

- (52) もっともマルクスはスミスの固定資本・流動資本の区別をケネーの原前貸し *Avancés primitives*、年前貸し *Avancés annuelles* の「翻訳」とし、理論的進歩退歩両面から評している。
- (53) 因に永田訳では、62節でも82節でも「土地を小作せしめ」で、借地農への投資になる。
- (54) 馬場、上掲註(2)の文献
- (55) Arthur Young, *Travels during the Years 1787, 1788, and 1789... of the Kingdom of France*, London, 1792. p. 529. 因にヤングの用語法にチュルゴの影響があこるとも考え得る。
- (56) 堀徑夫訳、リカード『経済学および課税の原理』雄松堂刊『リカード全集 I』
- (57) Jean-Baptiste Say, *Traite deconomie Politique*, 2Tomes, Paris, 1803.
- (58) シスモンデ著菅間正朔訳『経済学新原理』上下、1949、50年、日本評論社。
- (59) 五島茂、坂本慶一「ユートピア社会主義の思想家たち」中央公論社『世界の名著』42オウエン／サン・シモン／フーリエ、1980年、80ページ。
- (60) この引用文は、W. M. Thackeray, *The Newcomes*, Chap. XLVI, *The Hôtel de Florac*の中。OEDには1854 Thckeray *The Newcomes* II. 75とあるが、これでは引用文は見出せない。George Saintbury ed., *The Newcomes*, Humphery Milford/Oxford UP版だと、そのvol. I に1853とあり、vol. II のp. 606に引用文が出て来る。この版のvol. II の扉に、vol. II with 75 illustrationsとあるから、OEDの記述は一信じ難いことだが—この記載を読み誤ったものとも考えるしかない。なお、以上の判断に際しては、念のために前田昌子司書に同じ原図を見てもらった。
- (61) 手島正毅訳マルクス『資本制生産に先行する諸形態』1963年、国民文庫、73ページ。